

Faculty Development (FD) を考える：

国際大学交流セミナー

－中国語・中国文学専攻のFDへの取り組み－

松野敏之

はじめに

本専攻では中国の語学・文学・思想を学ぶことを主軸としている。ただし、「中国」と言っても、単純に日本とは異質の「外国」を対象として学ぶものではない。明治時代まで、日本の文章語・文学・思想の基底には漢学（中国古典学）があった。この漢学に基づき、現代中国語・中国文化を含めた中国学を総合的に学ぶことを重視している。その中でもとりわけ、現在の中国語や中国文化を学習するためには、実際にその国の人々と交流することが学生たちの意欲向上にもつながると考え、本専攻では国際大学交流セミナーを実施している。一例として、近10年（2004年以降）に交流した大学は次の通りである。

- 2004年 3月 蘇州大学
- 2005年 9月 台湾・国立中山大学
- 2006年 8月 蘇州大学
- 2007年 8月 蘇州大学
- 2008年 8月 蘇州大学
- 2010年 2月 蘇州大学 受入
- 2011年 9月 山西大学
- 2012年 9月 蘇州大学
- 2013年 11月 山西大学 受入
- 2014年 7月 蘇州大学 受入
- 2014年 8月 台湾・国立中山大学

「受入」とは、日本を訪問した海外の学生と本学で学生交流を行ったものである。本稿では、2013年11月の山西大学との交流セミナー後に行なったアンケート調査の結果と今後の課題について報告する。

国際大学交流セミナー（山西大学 受入）

2013年10月24日～11月4日、中国・山西大学の教員2人・学生6人が国士館大学を訪れ、本学学生と交流した。来日した学生は、比較文学、書道などを専攻する6人であり、本専攻の学びとも関わりが深いものである。滞在中は、日中

文化討論会、日中大学生事情交流会などを開催して、学生同士がそれぞれの観点で質問し、現代の日本・中国の事情を説明しあったり、漢詩・書道・儒家思想の講義において一緒に活動したりした。特に漢詩創作の講義では、中国人学生にも中国古来の伝統的な漢詩を作ってもらい、本学学生の作品とともに発表会を開催した。また、11月2日・3日は楓門祭にあたっており、山西大学の学生は自由行動の日であったが、本学学生と一緒に出店に参加するという交流も持った。昨今の電子媒体の発達により、帰国後もネットを介して中国語でやりとりをする学生もおり、山西大学の学生のその後の様子をうかがうこともある。この時に来日した山西大学の学生の一人は、翌年、長期留学のため日本に来られることとなったという報告も、本学の学生から先に聞いた。

この山西大学との国際大学交流セミナーの後にアンケートを行った。本専攻1年生～4年生まで124人を対象にしており、1年生28人、2年生20人、3年生25人、4年生6人の計79人から回答を得た。回収率は63.7%であった。ただし、10月末から11月初旬という日程は4年生にとっては卒業論文提出を目前に控えた時期であり、交流セミナーに参加できなかった学生も多い。4年生を除外した1年生～3年生の回収率は、82.0%となる。

アンケートの調査結果

A あなたはどの交流会に参加しましたか(複数回答可)

	1年	2年	3年	4年	合計
1 日中文化討論会	8	1	6	1	16
2 日中大学生事情交流会	5	1	1	1	8
3 漢詩創作発表会	24	0	20	2	46
4 書道実践	0	1	1	1	3
5 中国儒家思想講読	0	18	1	1	20
未回答(交流していない)	1	1	2	3	7

国際大学交流セミナーのうち、どのような交流会・講義に参加したかの設問である。参加した活動によっても、学生の自由記述に違いがある。たとえば、「1 日中文化討論会」や「2 日中大学生事情交流会」に参加した学生は、中国語で中国人学生と会話をしたため、今後の学習として「中国語に力を入れたい」「中国人の立場に立って考えてみる」「もっと中国語を練習する」などのコメントが多かった。一方、「3 漢詩創作発表会」や「5 中国儒家思想講読」に参加した学生には、「中国文学についてもっと知りたいと思いました」「ただ中国語を学ぶだけでなく、「中国」そのものを様々な面から学んでいきたいと思った」というコメントが散見された。

B 中国の大学生と交流できましたか？

	1年	2年	3年	4年	合計	1年	2年	3年	4年	合計
1 大変できた	2	0	4	1	7	2.5%	0.0%	5.1%	1.3%	8.9%
2 ある程度できた	14	5	4	0	23	17.7%	6.3%	5.1%	0.0%	29.1%
3 あまりできなかった	4	6	7	1	18	5.1%	7.6%	8.9%	1.3%	22.8%
4 全くできなかった	6	9	10	3	28	7.6%	11.4%	12.7%	3.8%	35.4%
未回答	2	0	0	1	3	2.5%	0.0%	0.0%	1.3%	3.8%

C 交流で中国語を使いましたか？

	1年	2年	3年	4年	合計	1年	2年	3年	4年	合計
1 よく使った	0	0	1	1	2	0.0%	0.0%	1.3%	1.3%	2.5%
2 少し使った	7	3	7	0	17	8.9%	3.8%	8.9%	0.0%	21.5%
3 あまり使わなかった	10	5	4	1	20	12.7%	6.3%	5.1%	1.3%	25.3%
4 全く使わなかった	10	12	13	2	37	12.7%	15.2%	16.5%	2.5%	46.9%
未回答	1	0	0	2	3	1.3%	0.0%	0.0%	2.5%	3.8%

学生の意識において、どの程度、中国人学生と交流をし、中国語を使えたと思っているのかを問うたものである。参加する活動においては、中国語を使う機会が少ないものもあったかもしれないが、今回訪問した中国人学生6人に対して、本学学生が20人前後となるため、やはり交流をしない／できない、あるいは全く中国語を使わないという学生も多くなったようである。これは交流活動の内容と人数を適正に保つ必要があるということであり、今後の検討課題としたい。自由記述においては、「もっと日常会話で使える構文を覚えたい」「発音をもっと意識して会話の練習に力を入れたいと思った」という意欲や、「中国の人と中国語でしゃべってみたかった」という悔悟から、「まず基礎的な会話を覚えさせるべき」という教学に対する注文まで出てきた。

ただし、本アンケートは国際交流セミナーにおいて直接対面した時のことを問うたものであり、メールアドレスを交換し、帰国後も中国語でメールでの交流をしている学生を含めれば、この意識はもう少し変化するものと考えられる。

D 交流活動を通して中国や中国の大学について理解が深まりましたか？

	1年	2年	3年	4年	合計	1年	2年	3年	4年	合計
1 大変理解が深まった	0	1	4	1	6	0.0%	1.3%	5.1%	1.3%	7.6%
2 ある程度理解が深まった	21	5	10	1	37	26.9%	6.3%	0.0%	1.3%	46.8%
3 あまり深まらなかった	4	5	6	0	15	5.1%	6.3%	7.6%	0.0%	19.0%
4 どちらとも言えない	2	9	5	2	18	2.5%	11.4%	5.1%	2.5%	22.8%
未回答	1	0	0	2	3	1.3%	0.0%	0.0%	2.5%	3.8%

実際に同世代の中国人学生と接してみて、中国に対する理解を深めることが出来たかを問う設問である。「1 大変理解が深まった」「2 ある程度理解が深まった」だけで54.4%。「B 中国の大学生と交流できましたか?」「C 交流で中国語を使いましたか?」において中国語で交流ができたと感じている学生が3割前後であることからすれば多くなっているが、半数を少し超える程度の学生しか理解が深まったと感じていないことは、交流活動への参加の仕方を考えさせられる。学生のコメントには、「現地の写真をもっと見てみたいです」「流行のもの(服、音楽)などの話とかもしたいと思った」「他人への理解の重要性を確信し、グループディスカッションなどに活かしていきたい」など、それぞれの興味関心で捉えてはいる。

E 交流活動はあなたにとって刺激になりましたか?

	1年	2年	3年	4年	合計	1年	2年	3年	4年	合計
1 大変刺激になった	3	2	5	1	11	3.8%	2.5%	6.3%	1.3%	13.9%
2 ある程度刺激になった	20	8	13	1	42	25.3%	10.1%	16.5%	1.3%	53.2%
3 あまり刺激にならなかった	2	5	4	0	11	2.5%	6.3%	5.1%	0.0%	13.9%
4 どちらとも言えない	2	5	3	2	12	2.5%	6.3%	3.8%	2.5%	15.2%
未回答	1	0	0	2	3	1.3%	0.0%	0.0%	2.5%	3.8%

どのような刺激を受けるかは学生次第であるが、7割近い学生には何らかの刺激となっている。学生のコメントには、「女の子が可愛かった♡」という率直なものから、「交流において語学の必要性を痛感した。従って履修にとらわれずより多く語学の授業を取り、学習しようと思う」という語学学習に対する意識を向上させた見解も見られる。また、中国に留学した経験のある学生は、「中国の学生はだいたい勉強熱心なので最低限自分の学んでいる専攻の事くらいは全て中国語で話せて訳せるようになりたい」「中文専攻生が中国の学生と交流する機会を持つことは当然。他専攻・学部生は置いてけぼりになる。中文専攻が他専攻生と中国学生との間に立ち、関係を築くような催しがあれば、説明する、伝えるという活動を通じて中文専攻生の理解もより深まるのでは」と、個人的な交流だけでなく、その仲介ということも視野に入れた感想を抱いている。

F 今後機会があれば、中国に行って交流したいと思いますか?

	1年	2年	3年	4年	合計	1年	2年	3年	4年	合計
1 強く思う	4	5	5	2	16	5.1%	6.3%	6.3%	2.5%	20.3%
2 ある程度思う	11	6	11	1	29	13.9%	7.6%	13.9%	1.3%	36.7%
3 あまり思わない	7	3	6	2	18	8.9%	3.8%	7.6%	2.5%	22.8%
4 どちらとも言えない	4	6	3	1	14	5.1%	7.6%	3.8%	1.3%	17.7%
未回答	2	0	0	0	2	2.5%	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%

今後、中国など海外に積極的に出る意欲を持っているか、あるいは持つようになったかを問うたものである。本専攻としては、中国語・現代中国文学を専門とする学生には、海外へ赴く国際大学交流セミナーや、短期留学・長期留学に積極的に参加して欲しいと願っている。アンケート上ではあるが、中国に行きたいと答える学生が6割弱、「1 強く思う」という学生は2割ほどであった。この割合が多いか少ないかは判断し難く、また最大の問題は国際大学交流セミナーに参加した時には、語学を強く学びたい、中国など海外に積極的にいきたいと思っても、その意欲が継続するかどうかである。

その後、どの程度の学生が語学学習に力を入れるようになり、また中国に実際に行ったのか、2014年7月に追加アンケートをとって調査した。これは2014年7月に蘇州大学の学生が本学を訪れた際に、同じように国際交流大学セミナーを開催し、参加した学生に訊いたものである。しかし、蘇州大学が本学を訪れたのは、前期試験期間一週間前という時期であり、山西大学の時のように専攻全体で交流活動を行うことは出来なかった。そのため、授業時間に重ならない範囲で、希望する学生10人前後が参加しただけであり、アンケートはそのうち7人から回収した。

積極的に交流セミナーに参加する意識の高い学生ではあるが、2013年山西大学との交流セミナー以来、実際に中国に行った学生は7人中6人。そのうち、翌年からの長期留学を決めた学生が1人、短期留学・セミナーに申し込んだ学生が2人、専攻の友人同士で旅行に行った学生が3人であった。また、語学学習に関しては、2013年山西大学との交流セミナー以後、より積極的に学んでいると自覚する学生が3人、ある程度学んでいるという学生が4人。その方法としては、語学学校や語学プログラムの利用、中国語検定試験の受験、中国・台湾人の友人との交流などが多いものであったが、この次に多かった方法は、インターネットを通して中国・台湾の友人を作ったというものであった。3人の学生が実際にインターネットを介して友人を作り、交流をしているという。これはあくまで積極的な学生の一事例であって全体の傾向ではないが、交流セミナー後に中国に行つて交流したいと思った学生たちのその後の動向例ではある。

今後の課題

海外の学生と接するだけで、何らかの刺激を受け、海外のことに関する理解を深めるわけではないということが調査によって明確化された。これは学生自身の意識の問題でもあるが、それと同時に土台がない段階でただ海外の人と交流しようとしても、刺激は得られないということであろう。日常の学習がいかに重要であるかということを感じさせられる。

本専攻としては、国際大学交流セミナーのような機会が学生の向学心を刺激す

るよう、日常の学習に力を注ぐことはもちろん、学びたいという学生の意識をいかに継続・発展させていくかが課題となる。国際大学交流セミナーを通して、日本と中国の学生が帰国後も、ネットを介して交流を持っていたり、新たな外国人の友人を作って交流したりするということが分かった。次のFD調査においては、このあたりの意識についても調べを進めたいと考える。

少し前までは、ネットで中国・台湾の方と交流するには、漢字の問題が立ちほだかっていた。欧米の人とはアルファベットを用いて交流することができたが、中国の簡体字・台湾の繁体字は閲覧と入力双方に問題があり、手軽な交流は望めなかった。それが昨今の発達により、学生たちも簡単に中国語(簡体字・繁体字)を入力し、相手の文章を閲覧することができるようになっている。このことを踏まえれば、今後の国際大学交流セミナーでも、事前に訪日する大学の学生と中国語でメールやりとりをして、相手に日本滞在中の希望などを訊いておくなどの新たな交流の仕方でも検討すべきかと考える。初めて交流セミナーで会うのと、事前に連絡をとっていた相手と、実際に交流セミナーで会うのとでは、学生たちの意識もまた異なってくるであろう。そのためには、日常の学習が重要であることに変わりはないが、本FD調査を通して交流の仕方にもまだ検討の余地のあることを自覚させられた。